

長崎刑務所における知的障害受刑者処遇モデル事業の効果検証

―体感協調プログラムのピア効果に着目して―

○ 日本福祉大学 氏名 湯原 悦子 (3745)

キーワード：長崎刑務所、知的障害者、体感協調プログラム

1. 研究目的

2022年6月、長崎刑務所において、知的障害のある受刑者の社会復帰支援に向けたモデル事業が開始された。この事業は長崎刑務所の社会復帰支援部門が担当し、地域で幅広く障害者の支援を行う社会福祉法人南高愛隣会がプログラムの立案と実施を担うことになった。2025年現在も、モデル事業は続いており、長崎刑務所内で受刑者個々の特性に合わせたアセスメント支援、処遇計画に基づく矯正指導等が行われている。

知的障害のある受刑者の再犯までの期間は短い傾向にあり、再び刑務所に入る者も少ない。出所後の再犯を防ぐためにも、彼らに対し、刑務所においてどのような働きかけを行えばよいのかを検討することは重要である。そのためにもこれまでモデルとして実施した事業の成果を確認し、知的障害のある受刑者個々の特性に応じた処遇プログラム立案に活かしていくことは喫緊の課題である。

そこで本研究では、モデル事業でなされているプログラムのうち、特徴的なものの一つ「体感協調プログラム」に注目し、①誰に対してどのような効果が見られたのか ②ピアスタッフがプログラムの運営に加わる効果の2点について明らかにしていく。

2. 研究の視点および方法

＜視点＞体感協調プログラムとは、受刑者が太鼓の演奏を学び、職員等、人前で集団での演奏を披露するというものである。このプログラムに注目した理由としては、刑務所においてこのようなプログラムを行った例はなく、また唯一、南高愛隣会の職員とともに知的障害のあるスタッフがピアの立場で加わっているものだからである。

＜方法＞体感協調プログラムに参加した受刑者本人（受講生）の満足度調査（他記式アンケート）、南高愛隣会職員と刑務所職員が記載した日々の記録について質的な分析を行った。調査期間は2022年10月3日から2023年10月31日までである。

3. 倫理的配慮

本モデル事業の効果検証に関する研究成果の公表については、法務省矯正局と日本福祉大学ソーシャルインクルージョン研究センターとの間で取り交わした研究に関する連携協定書に基づき行われている。本研究については日本福祉大学「人を対象とする研究」に関する倫理審査（申請番号 21-049-01）の承認を得た。なお、本研究に関連し、開示すべきCOI関係にある企業等はない。

4. 研究結果

受講生の満足度調査では、「よかった」139 (92.7%)、「まあよかった」7 (4.7%)、「どちらでもない」1 (0.7%)、「あまりよくなかった」と「よくなかった」は0、「不明」3 (2.0%)であった。

① 誰に対してどのような効果が見られたのか

受講生の変化として「技術あるいは技術の向上」と「意欲の向上」が確認された。「技術の向上」では、腕の振りがよくなった、リズムをそろえることができた、きれいに打っていた等、「意欲の向上」ではプログラムが進むにつれやる気が出、意欲的になったこと、対象者のなかには自主練を申し込む者がいたこと等が記されていた。

プログラムに同席した刑務所職員は、受講生が普段見せない表情を見ることができた、受刑者の頑張りに気づいた、変化していくことが分かったなどの気づきを得ていた。

② ピアスタッフがプログラムの運営に加わる効果

南高愛隣会職員の記録に記されていた内容として、雰囲気が柔らかくなる、個別対応が可能になる、身近なロールモデルとなる、よい関係を構築できる、安心感をもたらす、体調への配慮ができるなどが挙げられていた。

「ピアだからこそその効果」として、スタッフが自身のこれまでの経験を伝えるという場面があった。記録からは、受講者に「自身の経験、幼少期の辛い経験や、太鼓に出会い希望を持っている気持ちなどを言葉で伝えることが出来た」「演奏の合間にメンバーの生い立ちを語り、同じ境遇がある方々へ勇気を届けることができた」などの働きかけがあったことが確認できた。一方、懸念事項として知的障害のないスタッフと受講者との距離、それから言葉の使い方について課題があったことが記されていた。

5. 考察

体感協調プログラムの特徴は、受講者が「楽しみ」「成長する」姿を目の当たりにできることである。このプログラムを通して、支援者や刑務所職員は通常では見れない受講生の様々な表情や姿を確認している。そして、受講生なりの頑張りがあり、その人なりに意欲が向上していくことに気づき、発表会に向けて大きく変化していく姿、達成感を得ていく姿を感じ取っていた。本プログラムでしか行っていない知的障害のあるスタッフの関わり（ピアサポートの効果）については、「身近なロールモデルとなる」「雰囲気が柔らかくなる」「個別対応や配慮が可能になる」「よい関係を構築できる」などの効果が確認できた。スタッフが自身の経験、幼少期の辛い経験や、太鼓に出会い希望を持っている気持ちなどを言葉で伝えることはピアだからこそ働きかけであり、このような関わりが受講者の内面にどのように影響したのかについては今後、さらに調査を行う必要がある。

6. 文献

阿部百合子, 田島光浩 (2025)「長崎刑務所における福祉プログラムの試み」『こころの科学』(239), 55-59.